『みねさんの　あぁ、そうなんだ塾』　【第７８回】

社会的地位・名声・権力 … を得た人たちが事実を隠蔽し、ウソで自分や組織を守ろうとする出来事が連日報道されています。政治・行政のみならず、スポーツ界の指導者たちの傲慢さにも呆れ果てる毎日です。彼らは幼いころから一生けんめいお勉強し、その学力や運動能力、そして運も味方にして自分の人生の目標にたどり着いた人たちでしょう。その努力はスバラシイです。ただ、人間というものは欲深いものです。お金や権力、地位など、手にしたモノは手放したくありません。さらに「もっと多くを」「もっと上を」… とキリがありません。だから民主主義を壊し、スポーツのルールを無視するようになってしまったのでしょうね。能力主義、権威主義、結果主義 … などが大手を振る世の中で、伊藤隆二先生はハンディキャップがある子どもたちは「世の光なり」と宣言します。

✞ 神さま、なぜあなたが創った世界に「悪」があるのですか？（3）

「なぜハンディがある子が生まれるのか」― イエスの「こたえ」

なぜ、この世にハンディキャップがあるいのちが生まれるのか ― 聖書においてイエスはこの問いにどう答えているのでしょう。第 36 回でも取りあげた『ヨハネ』9 章の冒頭部分をもう一度読んでみます。

……

1 さて、イェシューさまは、通りがかりに、生まれつき目の見えない人に出会った。 2 弟子たちがイェシューさまに聞いた。
「師匠、この人が生まれついての盲(めし)いで生まれたのは、誰が悪いことをしたせいでございますか？」この人でございますか、それとも親たちでございましょうか？」
3 イェシューさまは答えなさった。「この人が悪いことをしたわけでもないし、親たちのせいでもない。神さまがこの人をお使いになって、何かなさりたいことがあるからだ。 4 日のまだ明るいそのうちに、俺をよこしたお方の仕事を俺たちはせねばならない。誰も働かれない夜が来る。5 俺がこの世にあるうちは、この世の光だぞ。」

…… 山浦玄嗣 『ガリラヤのイェシュー』……

この箇所について、伊藤隆二(いとうりゅうじ)先生が『この子らに啓発されて』(NHK E テレ『こころの時代』)でお話しになった内容を引用しながら考えていきます。

ここでイエスは、目にハンディを負った人について語っています。目が不自由なのは本人か両親のどちらかが「罪」を犯したからではないかと考えている弟子たちに対して、キッパリとそれを否定しています。この時代の人たちが病の原因を「因果応報」的に考えていたことによって社会的・法的にも差別を受け、排除や隔離されていた病者をその苦しみから解放したのがイエスでした(第 35～39 回をもう一度お読みいただければさいわいです)。

イエスは『神さまがこの人をお使いになって、何かなさりたいことがあるから』さまざまなハンディを負った人たちが生まれる ― というのです。新共同訳では『神の業(わざ)がこの人に現れるためである』になります。ハンディキャップがあるのは本人や両親のせいじゃない。それは「神さまがこの人を使って、自分がなさりたいことをするため」に選んだのがこの人だ ― と。ここでは目の不自由な人が例とされていますが、そのほかのハンディがある人たちや、何らかの「弱いところ」が

ある人たちも含んでいると受けとっていいでしょう。

『ここ(『ヨハネ』9章)では、何らかの意味で弱いところがある人たちの中に、本当の生き方をしている者がいるということをキリストは教えてくださっているんだろうと思う』と伊藤先生はおっしゃいます。

さらにイエスは、『俺をよこしたお方の仕事を俺たちはせねばならない。』と付け加えています。「俺たち」に注目です。「俺(イエス)」だけではないのです。神さまの仕事をするのは「イエスひとり」ではありません。イエスと一緒に「俺たち」、つまり「私たち一人ひとり」がしなくてはならないと言っています。それも『日のまだ明るいそのうちに』です。ユダヤの世界では、「夜」はサタン(悪魔)が動き回る時間です。だから「明るいうち=昼間」にするのです。「そのために、この世の光である俺は来たのだ」とイエスは私たちを励まします。

では、この話をお聞きの「あなた」が、そして話している「わたし」に神さまの仕事をすることなんてできるのでしょうか？　「お手伝い」することが可能なのでしょうか？　伊藤先生はそれができる人たちとは、『その目の曇りを取って、正しくそのものごとを見抜いた人達であり、(そうなることを)神は(私たちに)期待しているんだという意味だと思う』【( )内は筆者補足】と話されています。

私たちは「この世的な価値」を求めたがります。たしかに手を伸ばしたくなります。しかし、それが過度になると「本当の生き方」から逸脱してしまうことがあります。神さまは私たちに、「その目の曇りを取りのぞいて、オレのために働いてくれ」と期待しています。そのためにも「自分の生き方を見つめ直せ！」と、この世に「弱い人たち」を送った ― というのです。

「目が曇っている」人たちとは

イエスが「弱い人たち」をこの世に送った理由を述べている箇所がまだあります。『コリントⅠ』1章(フランシスコ会訳)を読んでみましょう。

……

27 神は知恵のある者を恥じ入らせるために、この世で愚かとみなされているものを選び出し、また、神は強いものを恥じ入らせるために、この世で弱いとみなされているものを選び出されました。28 神は、この世で取るに足らないもの、軽んじられているもの、つまり、無に等しいものを選び出されました。それは、何らかの場を得ているものを、無力なものにするためでした。29 これは、いかなる人間も神の前で誇ることのないようにするためでした。

……

神さまは「知恵のある者や強いもの、何らかの場(名誉、地位など)を得ているもの」を「恥じ入らせ、無力なもの」にするために、「愚かで、弱いと見なされているものや無に等しいもの」を選ばれた。それは人間が神の前で誇ることがないようにするためだ ― とイエスは言います。

(筆者注：「者」と「もの」という表記が使われています。「者」はもちろん人間のこと、「もの」と訳された箇所はギリシャ語の複数の中性名詞が意図的に使われているので「者たち」と、「人間」に限定した表現では訳せない ― と青野太潮(たしお)先生の『岩波版 新約聖書』に記述があります。)

私たちの人生の一面は「陽の当たる場所」すなわち、社会的な学歴・地位・名声・財産・名誉 …など「目に見える価値」の獲得を目指して競争し、他者の足を引っ張り、互いに傷つけ合い、優勝劣敗に一喜一憂している ― と言えると伊藤先生は書いています。そのような世の中では、社会的に成功した「強い人」と「弱い人」がいて、「強い人は善」、「弱い人は悪」、あるいは「業績をあげた人はすばらしい人間」で「そうでない人はダメ人間」だというような捉え方がでてきます。小中学校の卒業式でよく歌われる『仰げば尊し』ってご存じですよね。「身を立て、名をあげ、や

よ励めよ」―。今も歌われているのでしょうか？　それが人生の目的だと教えているようにもとれる歌詞です。自分の目標に向かって努力し、成功することは賞賛すべきことです。ただ、その過程で過度の自信家となり、自分を怖いものなしの価値ある人間だと自惚れ、他者を侮り、世間の人たちを自分の意のままにしたいと思いこむ … 。「成功した人たち」、つまり「知恵ある者」や社会的・経済的に「強い者」、「有力な者」がすべてそうだとは思いませんが、少なからずそんな人たちがいるのも確かです。

より多くの「財産」を得た人は、ほかの人が自分より多く富を得ると動揺します。「おもしろくねェな」と思い、「もっともっと」欲しがります。もう十分富んでいるはずなのに、なんとなく落ち着かず、焦ったり苛立ったり、不安になります。「地位」や「名誉」も同じです。その維持、拡大のため「ちから（財力、権力など）」に頼り、人間性まで浸食されていきます。ほら、テレビや新聞で毎日報道されている某国の「ウソ八百」の最高権力者、官僚たち、某大学アメフト監督、コーチ陣 ― 数え上げたら両手の指では足りないほどの人たちが思い浮かぶのではないでしょうか？　「目が曇っている」人たちです。

ハンディキャップがあるこどもたちとは

今、ロシアで行われているサッカー・ワールドカップ。日本チームは開催２か月前に監督が交代しました。「選手とのコミュニケーションに問題があった …」というのが主な理由だといいます。「何を今さら」とわたしには思えるのですが …。新監督になった西野さんも大変な役目を仰せつかったものです。わたしは「こりゃ、予選リーグ３敗で終わりだな」と予想しました。ところがところが！　ご存知のように強敵コロンビアに逆転勝ち、グループH最強と言われたセネガルと引き分けという快進撃！　最終戦はポーランドに敗れたものの決勝トーナメント進出。その要因は西野監督の選手一人ひとりの持ち味を活かした起用と、練りに練った戦術だと言われます。前監督のように自分の戦術を「こうやれ！　ああやれ！」と押し付けるのではなく、選手の能力と特性を見極め、自分の考えを土台にして選手たち意見も取り入れながら「チーム」という組織をつくった成果です。「選手」を「ハンディがある子どもたち」、「戦術」を私たちとハンディがある人たちとの「人間関係」、「チーム」を「共同体」ということばに置き換えれば、私たちが「目の曇り」を取りのぞくための大きなヒントが見えてきます。これを手がかりに話を進めていきましょう。

伊藤先生は「障害者」という言葉を使わないようにしようと主張します。「障」の自動詞は「障（さわ）る」です。「障る」とは「じゃまになる」・「害になる」という意味です。「害」は公害・災害・有害・阻害・危害 … など、何かを傷つけたり、生存の「妨げ」になるものや、じゃまをすることに用いられる漢字です。「障害者」という言葉は、受けとり方によっては「社会にとってじゃまな存在で、よい影響を与えない差しさわりのある人」になります。こんな言葉を政治家やマスメディアが何の配慮もなく、平気で使っているのが日本の社会なんだ ― ということを訴えておられます。（ここ数年、「しょう碍者」という平仮名と漢字をあてて表記している出版物もあります。でも「碍」も、「さまたげる・進行をじゃまして止める」という意味があります。）　わたしが「ハンディ（キャップ）がある子ども」という書き方をしているのは先生の主張を支持しているからです。

伊藤先生は知的ハンディがある子どもたちとは、「悪いことをせず、人を押しのけることをせず、うらやむことも、妬むこともなく、見栄も張らず、うぬぼれることもなく」、「無言で、思い煩う人々を慰め、勇気づけている」人たちのことだといいます。子どもたちと共に歩んだその長い経験から導き出された重いことばです。「何かが他者よりできること」、「何かを他者より多く持って

いること」で人間としての評価は高まると考え、その対極にいるハンディがある子どもたちは「無価値」であり、ときには「有害」であるとさえ考えているのが「目が曇っている人たち」だと先生は指摘します。その自覚がない人たちの中には「このままでは人としての価値がなく、ときには有害である子どもたちの価値を高めよう、害を益に変えよう」と、働きかける者もいます。しかし先生は、「この子ら<u>に</u>世の光を」「この子ら<u>を</u>世の光に」というのは、子どもたちが『明らかに〈客体〉であることをさす』と指摘します。〈主体〉が〈客体〉に働きかけるとは、〈客体〉は〈主体〉に意のままに変えられることを意味します。〈客体〉は対象者、あるいは対象物となってしまいます。そう、第69回でお話ししたマルティン・ブーバーの「Ich（イッヒ） und（ウント） Es（エス）（我とそれ・もの）」の関係になってしまうのです。これでは「上の者」は「下の者」を下に見つづけることになります。

知的ハンディがある子どもたちと「わたし」との関係

前回お話を伺ったＡさんとＢさんは、さまざまな経験を積み重ねてお子さんとの関係を「Ich（イッヒ） und（ウント） Du（ドゥー）（我と汝・わたしとあなた）」にすることができた方々なのです。「わたし（Ａさん・Ｂさん）」が二人称で呼びかける「あなた（お子さん）」は、〈いま・ここにいる・誰とも代わることのできない・たった一人の「あなた」〉になったのです。また、かけがえのない「あなた（お子さん）」の呼びかけに「わたし（Ａさん・Ｂさん）」が応えるとき、「わたし（Ａさん・Ｂさん）」もまた「あなた（お子さん）」にとってかけがえのない存在になり、そこに「「Ich（イッヒ） und（ウント） Du（ドゥー）（我と汝・わたしとあなた）」の絆が生まれます。

さあここで、また新たな課題がでてきました。「みねさん、イッヒ ウント ドゥーの関係を、っていうのはわかるんだけどさぁ、それって超ムズカシクない？」という声が聞こえてきます。そうなんですよ！　家族でさえ一筋縄ではいかないのに、自分と他者がこのような関係をつくりあげることは簡単ではありません。ジャン・ヴァニエ氏に言わせると、『競争社会で私たちはじつに高価なものを失った。私たちの共同体を失った』― そんな現在の世の中、社会の現実を見れば実現困難な要求に見えてきます。ではどうしたらいいのでしょう？

自分自身の「貧しさ」を発見すること

実はその問いに対する答は、もうすでに第24～25回でお話ししました。そのときの内容を少し補足しながら、まとめてみます。もう一度ヴァニエ氏の声に耳をかたむけてください。

▶ヴァニエ氏は、目と耳が不自由で脳もひどく損なわれたエリックと、身体が硬直し歩けず、麻痺があるルシアという二人の青年と共同生活を始めました。

▶その中で、叫び、暴れ回る二人に対して、自分でも信じがたいほどの彼らに対する怒り・苦痛・恐怖、そして憎しみにも似た感情さえもった自分を経験しました。「こころの泉が干からびた自分」、「こころの中に暗い世界がある自分」を認めざるをえませんでした。。

▶氏はこの経験から、「自分がいかに〈貧しい〉か」を知りました。

▶また、自分の中の〈闇〉や〈破れ〉を認めたとき、〈光〉が差しこんだことを味わいました。私たちは「自分のもっている傷を受け入れることができて初めて、傷ついている他人を思いやることができる」ことに気づきます。

▶「弱くてもろい面をもった自分、でも、あるがままの自分でいい」ことを自覚しました。なぜなら、「私の弱さは、ほかの人の〈賜物〉による助けが必要なことを教え、ほかの人の弱さは、私の賜物による助けが必要なことを教えるから」と悟りました。
▶さまざまな〈賜物〉を神さまからいただいた一人ひとりの人間は、「共同体」という一つの体を構成しており、私たちはいわば、「共同体の中で生きる存在」として召されていると氏は語ります。

「共同体」― いちばん小さいものとしての「家庭」からスタートして、親戚・縁者、友人、隣組、町内、市町村、県などの「地域社会」… などの生活空間の中で、お互いの賜物を「与え・受けとる」ことによって、自分を守るために身につけていた「武器」、すなわち名誉・地位・財産 …、それらが生みだす傲慢さ、嫉妬、憎悪、欺き … を棄て去ることができるとヴァニエ氏は説きます。

Aさん・Bさんとお子さんたちの歩みが「家庭」の中だけにとどまらず、積極的に「学校」・「地域社会」という「共同体」に進み、自分と子どもたち、ハンディがある子どもたちの保護者、地域のみなさんがもつ〈賜物〉をたがいに認め合い、与え合い、受けとり合ったからこそ、お二人の「お子さんたちを見つめる眼差しのやさしさ、ゆたかさ、思いやりの深さ」が培われ、それゆえ「絶望から感謝への大逆転ドラマ」が成立したのです。時の流れの中にある神さまの慈しみ深さと、私たちの思いを超えた神さまの知恵におどろきます。

自分の目の中の「丸太ん棒」を取りのぞけ！

ほかの人の弱さ・貧しさ・醜さ … を見つけるのはかんたんです。しかし、自分にもそんな面があることを認めることは、なかなかできるものではありません。でも、私たちの人生の中で、そのチャンスはたくさんころがっているはずです。イエスは『マタイ』7章でこう言っています。

……

3 弟の目玉の中にある大鋸屑（おがくず）は見えているのに、自分の目玉の中の丸太にはトンと気がつかないままなのはどうしたわけだ？ 4 弟に向かって、「お前の目玉の中にある大鋸屑（おがくず）を俺に取らせろやい」などと、その面（つら）下げて言えるものかね？ 自分の目玉には丸太が入っているではないか。5 御立派ぶりの大根役者殿、まず、お前さんの目玉からその丸太ん棒を放り出せ。そうすれば、ものもハッキリ見えるようになって、御舎弟（ごしゃてい）殿の目玉の中の大鋸屑も取ってやれるようになるぜ」

…… 山浦玄嗣 『ガリラヤのイェシュー』……

わたしは教員生活のスタートからハンディがある子どもたちと出会い、そのチャンスを与えられました。でも、なかなか「自分の目の中の丸太ん棒」を取り除くことができませんでした。野球で言えば「ノーアウト・満塁」のチャンスが1回表から訪れたようなものにもかかわらず …。それでも神さまはじっと我慢して、わたしを見守ってくれました。何度も何度も似たようなチャンスを与えてくださいました。やっとそれをモノにしたのは、20年近く経ったときでした。

伊藤先生は番組の最後に次のように語っています。「何かしたり、できたりすることが価値なのではなく、そこでその人らしく誠実に純粋に生きている、生きているそのことに価値があるんだということを発見してほしい」。

神さま。私たちがこの世の価値観に惑わされず、「神と隣人を大切にしなさい（愛しなさい）」というイエスさまの教えを忘れず、毎日の生活の中で〈澄んだ目〉をもって「あなたの道」を歩めますように。

(2018.07.11.)

【引用・参考にした書籍など】
・伊藤隆二 『愛と幸福と教育と』伊藤隆二教育著作集2

・伊藤隆二　『なぜ　この子らは世の光　なのか　―　真実の人生を生きるために』（樹心社、1995）
・伊藤隆二　『この子らに啓発されて』（NHK Eテレ『こころの時代』1996年４月７日放送）
・山浦玄嗣　『ガリラヤのイェシュー』　　・新共同訳　『聖書』
・ジャン・ヴァニエ　『小さき者からの光』（あめんどう、2001）